

創造の宇宙と色宇宙

関根英二 画家 美術研究所ルポー主宰
www.lebeau-jp.com
日本美術家連盟会員
日本色彩学会会員

創造という活動は、ひとつのモチーフに始まりイメージし構想する内的な創作(creation)と、その具体的な構成・制作(formation)との総合です。モチーフ(motif)というのは客体系(objet)と主体系(sujet)との出会い(契機)ですが、その力に始まる創から造への全体系を「創造の宇宙」と呼びます。

よき創造的個性はそのモチーフの必然に全的に「身を入れる」こと、つまりモチーフに生と知と技の全体で働くことによって一つの作品を生み出すのです。このモチーフにはじまる創造表現のシステムはこれが芸術であろうと自然現象であろうと、そして色の体系であろうとまったく同相の、つまり動的原理です。

ものごとが生れ、形成・進化して自己実現を達成し、やがて変容の果てに無限の原点に回帰していく自然の理(ことわり)が創造の全体系なのです。この意味では創造の体系や色体系の普遍性は自然現象や生命の宇宙にその「理」として読みとれます。

そこで生命の宇宙と色体系との同相性を見てみましょう。

まず潜勢的な場(暗黒)にひとつの生命が宿り(莖)、自己形成し(青・青緑)、発芽し(緑)、成育進化し(緑黄)、開花結実する(黄)。次いでこの新しい個体は多次元の相互作用場(黄赤)を涉って成熟し(赤)さらには爛熟(赤紫)・変容の果てに崩壊し(紫)無限の暗黒に回帰していく こうした色の実体やエネルギー特性を含んではじめてよき配色も可能となります。

この暗黒に始まり、暗黒に回帰する色の生成・昇華の体系、これを色宇宙(Color Cosmos)と呼びます。

CD-ROM でご紹介する<色宇宙>は、西欧の精神風土に生まれた「光(白)」を原点とする一般の三属性(明度・色相・彩度)の色体系とは本質的に異なり、色を質量と力(mass-energy)と時空場としてとらえた創造のための色体系です。

以下の資料は美術研究所ルポーのテキスト<色宇宙・配色調和>から抜粋したものです。

- 1) 「東西の色の原点」本文及図版
- 2) 「色宇宙」図版
- 3) 「色体系の位相」図版

東西の色の原点 玄と光 世界観と色体系；自然主義と人本主義

「玄」という字がある。黒であり、天空や天の色、それも北天を指す。玄黄といえば天地を意味する。老子の玄はさらに、万物万象の元とか始めを意味し、玄元・玄之又玄という語もある。ここから

深遠なるもの、深奥の真理の意も生れ、老子の思想を玄学または単に玄とも呼ぶ。これが東洋の暗黒である

しかしこの黒が西欧では否定的にとらえられ、ブラック・リスト、ブラック・ホール(反対票)といった、ほとんど玄とは対照的なイメージになる。ブラック・ホールといえば天体の成れの果ての重力場で、私達にはある種の夢を感じさせるが、その本来の意味は「牢獄」である。

こうした東西の黒の位相の違いは、まさに世界観のあらわれである。黒という、光の届かない不可知の世界、あるいは沈黙の实在が、人間にとって何か、という問題である。東では暗黒を超えてある実体、ものごとの始源としてその潜勢力を肯定し、あるいは陰陽一体として受け入れる。しかし西ではものごとの果て、有の否定として現実的相対的に表象するのである。

この東西の黒の位相の相異は、あるいは農耕民族と狩猟民族との、自然観の根源に由来するものかもしれない。

農耕民族にはまず「約束の地」がある。つまり空間的領分とその持続としての歴史が、その生を包んでいる。母なる黒い大地と四季の恵み、暗い冬や夜に森羅万象が生成し、日々の生は無限の超越的宇宙に紡がれていく— この民族にとってはしたがってそうした大自然の運行に適應していくべく視界を総合する視覚系が要求される。右脳主体の自然主義的体系が出来ていくのである。

他方、狩猟民族には生の具体的基地となる「約束の地」がない。大地や四季の移ろいは獲物への距離であり時間であり、条件の変動であり障碍なのだ。その時空的条件の最悪のものがつまり闇であり冬なのだ。この狩猟民族にとっての視覚系は、農耕民族のような視野にひらいた直観(右脳主体)よりも、対象をとらえる利き目の視力(左脳主体)である。そしてこれとともに自然音・環境音などの中から対象に結びつく特定の音を聴き分け、解析・構成するための鋭敏な聴覚系が要求される。

注;アフリカ人は、視力 4.0 台、暗順応 1 秒(平均的日本人では 20 秒程度)という鋭敏な感覚の持ち主である。

狩人にとってはしたがって視覚は生きるためにあって、暗黒はその否定になる。白は光に通じ、即ち神であり、その対極の黒は闇であり悪魔や死に結びつくのである。こうして左脳主体の即物的合理的な、現実主義的体系がつくられる

色の原点となる黒と白との、この東西の表象は、古代中国の現象的宇宙論とも言うべき陰陽五行説や九星術における色と、アリストテレスの感覚論との、色列の相異をなしていくのである。

九星術は、一白水星、二黒土星、に始まり三碧木星、四緑木星、五黄土星、六白金星、七赤金星、八白土星そして九紫火星— 白黒青緑黄赤紫の 7 色である。絶対的な暗黒である「玄」の宇宙に生まれた現象世界の相対性— 陰陽が明暗となって、これが一白、二黒と定位され、有彩色の順序は自然の秩序で、つまり短波長から長波長へと並ぶ。

一方アリストテレス感覚論の色列は、光から闇への変移に色が生じるとして、白黄赤紫緑青黒で、九星術と同じ白・黒と 5 色相の 7 色だが、明から暗へと順序づけられる。感覚論であれば当然の事乍ら、光の量であり相対的現象の序列である。したがって正確には白と黒ではなく明暗である。(そういえば、アリストテレスの有限天動宇宙モデルを九星術ならぬ九天説という。東西の 5,7,9 の符号が面白い)

しかし「玄」の宇宙は絶対的な無であり、元である。明暗(現象)とか黑白(実体)といった相対性を超えた力(場)である。この無限超越の絶対的場から物質(存在)と力(現象)が分化し、そのそれぞれが黑白となり、明暗のペアとなるのである—まさに「玄」は原宇宙である。

黑白は実体(基体)概念で、洋の東西を問わず、黒が前(Black & White ; Noir et Blanc)であり、明暗は属性概念で明が前(Light & Darkness ; Clair et Obscur—遠近法の意もある)になる。基体は基数、属性は序数にあたる。—順序は秩序である。

こうした意味で、東の暗黒はあらゆる相対性を超えてある無(という実在)で、たとえばいわば右脳だ左脳だを超えた「中心脳」の宇宙である。

したがって陰陽五行説でさえもすでに第二階の、相対的現象的ないわば通俗的な世界観の次元なのである。

この私達の宇宙のはじまりもまさに玄である。物質とエネルギーが渾然一体で、明暗の相対性以前の無限的場である。やがて生命における細胞分裂のように物質と光が分化していつはじめて、玄は黑白を生み、相互作用が生じ、明暗を成すのである。

物質が分化し、光が直進できるようになると宇宙が晴れ上がる。この時点までが約10万年といわれている。このあたりからが物質の時代になり、いわゆる色が生まれてくる。やっと陰陽五行の世界が始まる。陰陽二気から万物万象が分化展開されていくのである—

神がカオスに立って「光あれ」と言い、その光に始まった西洋の色列は、明から暗へ(YRPG)と序列を成したが、東洋の体系は、陰・陽によって、BGYP と、正確にエネルギー強度の順に配列するのである。

絶対的な玄に必然するところであるが、時空や物質と一体化された東洋の宇宙観のしからしむるところである。

この玄(暗黒)に始まる東の色観に対して、いわば現象的な明(光)にはじまる西の有限的な色観が、良かれ悪しかれその後の色体系の根幹を成していくのである。すくなくともアリストテレスの形而上学は(東洋では陰陽五行説がそれにあたるが)西の風土では形而下諸学を包括するような総合的体系を成す方向ではなく、あくまでも諸学の上に普遍学としての抽象的な座をしめることになる。したがって現象的な「色」については専ら形而下の経験科学である物理学あるいは生理学が体系を性格づけていく

アリストテレスの「光から闇へ」のイメージは、いわば形而下から形而上へ、可視的経験的世界からその内奥の本体や原理へ、という知の方法論である。この「帰納法」を科学の方法に据え、その帰結として与えられる一般普遍の原理から「演繹」して多様な事象を読もうとしたものである。

アリストテレスの色は光と闇の間に生まれ、原色としては白・黄・黒の三色である。したがって有彩色は黄の変容として、これと黒との間に、光度の大小の順で黄から赤、紫、緑そして青と並ぶ。これはソクラテスゆづりのエパゴーゲー(特殊から一般・普遍へ、という帰納論理)に沿っていて、主体側の現実からしだいに客体世界の内奥に向かう、という人本主義的方法論—これがつまり東洋の遠近法に対してその逆の近遠法—である。

この白と黒の混合説は、レオナルド・ダ・ビンチにも残光をみることが出来るが、より重要な事態

として、近現代のオストワルト色体系の基本構造に継承されている。「闇は光の欠けたところに生じる(アリストテレス)」は、そのままオストワルトの色体系に定量化され、白と黒の混合比での「黒色量」となっているし、色環の始点、色相の第一を黄としたのもアリストテレスによっている。因みにノーベル賞物理化学者オストワルトの哲学は、エネルギー一元論である。光覚的作用大の黄から数えたのもうなずける。

つまりは「光(現象)から闇(本質)へ」であると同時に「光(真理)から闇(現実)へ」でもあるのだ。

ところが、実際はその思惑に反して、形而下の諸学は、その「帰納法」がもたらす当然の成果に膨張し細胞分裂する現実に対応するのが手いっぱい、上を向くどころか天を仰ぐ仕儀となっていた。

光から闇へ、の論理はこうして有限(抽象)定量化を促すことになり、多様化した領域の数に等しいだけの「闇」を負うことになった。「玄」を求めてなんとパンドラの函を開けたのである。

今世紀初頭に始動した科学や思想の根底をゆるがす変革は、こうした抽象・定量論理の飽和と挫折がもたらしたものに他ならない。

しかし、ニュートン光学は、光から闇へ論法の青春期の輝かしい記念碑の一つではある。その「光学」に記された膨大な実験研究の足跡は、帰納法の直接の成果といえるだろう。

現象から本質へ、あるいは観測主体側から客体の深奥へ、といういわば人本主義の論理である「近遠法」は、東洋の超越的玄に始まる自然主義の演繹の体系(これが「遠近法」である)とは対照的である。東の右脳主体と西の左脳主体との相異によるものと考えたくもなる。

ともあれ、物理学はニュートンによって光学から「色彩学」を生み出した。そして「光は色に非ず(色は感覚)」という命題によって、客体系の物理学と主体系の生理学との結び目に、後の生理光学を動機づけるのである。

さて、ニュートンのプリズムは自然光(白色光)からスペクトルを現出した。ニュートンはこれを虹の7色と見て、音楽との類推によって長波長から「赤橙黄緑青藍堇」と順序づけたのである。そしてこれを環状に配し、中心に自然光を位置づける。これは任意の色光の混合のための図表であるが、「ニュートン・サークル」と呼ばれ、いわゆる色環の元祖とされていくのである。

それにしても、ニュートンはその多様な実験の過程で、プリズムとレンズを組合せて生じた色輪ニュートン・リングに、黒を中心として(!) 堇・青・緑・黄・赤そして紫、と正確に波長順に並ぶ色列も観測記述している。

(光学; 第 篇、第一部、観測 4 など) その後の色彩論や色体系に及ぼすニュートンの威光を考えると、音楽とのアナロジーに惑ったその自然哲学の精神(「吾は仮説をつくらず」)は、惜しみても余りある

色彩現象を生むのは、光子のエネルギー特性(振動数/波長)によるものとして、色列がエネルギーの大小にしたがって短波長(V)から長波長(R)へと秩序づけられ色度図(マックスウェル)を成すには150年を要した。その電磁波説に次いで、すべての色を吸収しかつ放射する「黒体」の概念が生まれたのはさらに50年、そして赤から紫へ、をつないだCIE色度図が完成したのは1931年である。